

モーツァルトの《デモフォオンテ》
(神戸モーツァルト研究会 第206回例会)

野口秀夫

1770年2月7日ミラーノにてフィルミアーン伯爵からトリノ版「メタスタージョ全集」がモーツァルトに贈られた。そのリブレットを用いて早速アリアの作曲が試みられている。ミラーノからレーオポルトが出した1770年3月13日付の妻宛ての手紙で「前の土曜日には手紙が書けませんでした。というのは、ヴォルフガングが昨日フィルミアーン伯爵のところで開かれたコンサートのために3曲のアリアとヴァイオリン伴奏付レチタティーヴォを作曲しなければならなかったからです。そして、私はヴァイオリン・パートを自分で書き写さなければなりませんでした。そうしてからそのパートを皆に写譜させないと曲を盗まれてしまうからです」と報告している。この手紙に先立って、2月27日付手紙の最後には、「ヴォルフガングは2曲のアリアの作曲で忙しくしています」と書いており、これらのアリアが《デメトリオ》によるK.73A[紛失]《アルタセルセ》によるK.88(73c)、そして《デモフォオンテ》によるK.77(73e)と考えられている。事実K.77(73e)にはヴォルフガングの手になるレチタティーヴォ用、ならびにレーオポルトの手によるアリア用のヴィオローネのパートが残されている。

モーツァルトが作曲し、結局オペラ全曲^{注1}には至らなかったメタスタージョのリブレットによるアリアの数は17曲を数える^{注2}(紛失したものは除く)。そのうち7曲が《デモフォオンテ》のリブレットによるものである。《デモフォオンテ》は1731年(あるいは1733年)にピエトロ・メタスタージョによって書かれた台本で1733年にはアントーニオ・ガルダラが作曲しすぐに評判となり、1800年に至るまでに73のオペラが作曲されている^{注3}。モーツァルトはミスリヴェチェクの《デモフォオンテ》上演を報告してもおり^{注4}、この物語あるいはオペラセリアに興味を持っていたであろうことは想像に難くない。

普通モーツァルトのアリア集などでは声部別に編集されたものや作曲年代順に編集されたものを聴くことが多いが、唯一リブレットの筋を辿って聴くことができるのがこれらのアリアである。そこに序曲を付加し、科白あるいは語りを入れて歌劇《デモフォオンテ》を仕上げる試みがなされたCDがこのほど発売された^{注5}。しかし7曲のうちK.71は後半が紛失しているため録音されておらず、また、K.83(73p)は2版あるうちの片方しか録音されていないなどすべてを聴けるわけではない。例会では《デモフォオンテ》の筋を辿りながら作曲されたアリア全曲を聴き、モーツァルトのこの台本あるいはオペラセリアに対する取り組みの意気込みを探ってみる。

K.71のテノールのアリアはこの台本の最初のアリア曲であることや、五線紙がイタリア製であることからモーツァルトが「メタスタージョ全集」を贈られてすぐに作曲したものとされてきたが、この五線紙が使われているのはこの曲だけであることからタイスンも「恐らく1770年の初め」と言っているように断定はできない。したがってモーツァルトが1770年3月に作曲した前述のK.73e(77)の存在は重要である。15歳の少年であっても、台本のクライマックスを早期に適切に捉えて作曲しているからである。第3幕第4場のレチタティーヴォ・アコンパニアートがそれで、知らずに犯した罪の恐ろしさに嘆く様子を立派に歌い上げている(レーオポルトの指導もあったのであろうが)。しかしそれに続くアリアが台本には無く、第5場のアリアを持って来ざるを得なかったため、さすがのモーツァルトのアリアも木に竹を接いだようになっているのは残念である。

結果として台本の後ろのほうから先に作曲を始めていることになるのだが、これは少年モーツァルトが感情の表現が豊かな歌詞に専ら曲を付けることに腐心したことの表れと思われる。筋を辿りながら聴いていくと更にこのことがよく分る。逆にデモフォオンテ王には一回も曲を付けていないのは感情の起伏を感じられない役柄だとみなしたからであろう(王の発声は3791母音でティマンテの6165母音に次いで2番目に多いのにも拘わらずである。因みに3位はディルチェアの2323母音、4位はクレウザの1822母音である^{注6})。王でもイドメネーオやティートのように悩める王のオペラ台本がモーツァルトに与えられたのは、したがって幸運であったと言えよう。「メタスタージョ全集」がオペラの依頼台本としてでなく、習作用あるいは単発アリア用に使えた台本であったからこそ気に入ったアリアのみ選び、好きなように作曲できたのであり、デモフォオンテとマトゥージョ以外すべてソプラノ(5名の内2名はカストラート、1名は歌詞のない恐らく乳児のオリント)ばかりというオペラ全曲を作曲するということになればモーツァルトも異なった対応を迫られたに違いない。

《デモフォオンテ》

第1幕 第1場

トラキアの王デモフォオンテの家臣マトゥージョが、恒例のアポロンの祭壇の生贄に自分の娘ディルチェーアが当たりはしないかと案じて歌う。

アリア「ああ、もう震えおののこうとは思わぬ」K.71 (断片) [70 春]

テノール：マトゥージョ

O più tremar non voglio	ああ、もう震えおののこうとは思わぬ
Fra tanti affanni e tanti;	いまや、多くの心配を受け入れよう；
O ancor chi preme il soglio	そうでなければ、王座に座る者すら
Ha da tremar con me.	私と一緒に震えるであろう。

Ambo siam padri amanti,	私たちは二人とも教父を愛している
Ed il paterno affetto	そして、彼らの父なる愛は
Parla egualmente in petto	等しく王の心や
Del suddito e del re. (parte)	臣民の心に語りかけるのだ。(退場)

(野口秀夫訳)

ルジ・アム(テノール)、ウ・オイフ・ライス指揮、シジ・ア・フィルム・オーケストラ管弦楽団 PRL 2152

第1幕 第2場

フリギアの王女クレウーザとの結婚のため戦場から呼び戻されたデモフォオンテの長子ティマンテに対して、国の掟に背いて彼と結ばれ子供まで生んだ臣下の娘ディルチェーアが祭壇の犠牲になる予感に身を震わせつつも、夫のための愛の死なら厭わないと気丈に歌う。

アリア「あなたに希望を託しましょう、おお、愛する夫よ」(未完) K.383h (440) [82 春? ヴィーン]

ソプラノ：ディルチェーア

In te spero, o sposo amato;	あなたに望みを託しますわ、ああ、愛する夫よ、
Fido a te la sorte mia:	私は自分の運命をあなたにゆだねます。
E per te, qualunque sia,	そして、その運命がたとえどんなものであろうとも、
Sempre cara a me sarà.	あなたゆえに、それはいつでも私にはいとしいものとなりましょう。

Pur che a me nel morir mio	私が死んでゆく時に、
Il piacer non sia negato	私があるのだと誇る
Di vantar che tua son io,	喜びが拒まれることがなければ、
Il morir mi piacerà. (parte)	死は私の喜びとなることでしょう。(退場)

(海老澤敏訳)

イグ・アリト(ソプラノ)、イルク＝ペーター・グアイグ指揮、ドレスデン・フィルム・オーケストラ管弦楽団 SMZ 172

第1幕 第4場

父デモフォオンテからクレウーザを妻とするよう命令され、しかも弟ケリントが彼女をフリギアへ迎えにいとっていると聞かされ、驚きと失望の気持ちを訴えるティマンテの独白。

レクイエムとアリア(シエナ)「だが、おお星々よ、憐れなるディルチェーアがお前たちになにをしたのか」K.368 [79-80、ザルツブルク] (ザスロー説 79-80/80-81)

ソプラノ：ティマンテ

Ma che vi fece, o stelle,
La povera Dircea, che tante unite
Sventure contro lei? Voi, che inspiraste
I casti affetti alle nostr' alme; voi,
Che al pudico imeneo foste presenti,
Difendetelo, o numi: io mi confondo.

だが、おお星々 [=運命] よ、憐れなディルチェーアがお前たちに何をしたのか、幾多の災難をこぞって彼女に向けるほどのことを？ あなた方こそ、私たちの魂に清純な愛情を吹き込まれたのだ。あなた方こそ貞節な婚姻に立ち会われた方、私をお守りください、おお、神々よ。私は混乱している。

M'opprese il colpo a segno, Che il cor mancommi, e si smarrì l'ingegno.	私は衝撃に打ちのめされて、 心はここになく、知力を失っている。
Sperai vicino il lido, Credei calmato il vento; Ma trasportar mi sento Fra le tempeste ancor;	岸边は近いと望んでいた、 風も凪いだと信じていた。 だが、私は感じるのだ、 またもや嵐のただ中に運ばれていくのを。
E da uno scoglio infido Mentre salvar mi voglio, Urto in un altro scoglio Del primo assai peggior. (parte)	そして危険な暗礁のひとつから 逃れようと思う間もなく、 別の暗礁に私は突き当たるのだ、 先のものよりずっと恐ろしい暗礁に。(退場)(海老澤敏訳)

エフ・イタ・グ・ル・ローヴァ(ソプラノ)、レ・ホルト・ハーガ -指揮、ザ・ルツブ・ルク・モーツァルテウム管弦楽団 SMZ 170

第1幕 第7場

フリギアの王女クレウーザが自分の婚約者ティマンテの弟であるケリントの密かな愛の告白に心動かされながらも、表面では冷たく退ける。

アリア「私は小心な恋人の愛など気につけない」K.74b [71 初、ミラーノ/パドヴァ]

ソプラノ：クレウーザ

Non curo l'affetto D'un timido amante, Che serba nel petto Sì poco valor.	私は気につけぬ、 小心な恋人の愛など、 そのひとの心には ほとんど勇気のかけらさえないの。
Che trema, se deve Far uso del brando, Ch'è audace sol quando Si parla d'amor. (parte)	そのひとは震えてしまうの、 剣を使わなければならぬとなると、 そのひとは厚かましいの、 恋の話となる時だけは。(退場) (海老澤敏訳)

エフ・イタ・グ・ル・ローヴァ(ソプラノ)、レ・ホルト・ハーガ -指揮、ザ・ルツブ・ルク・モーツァルテウム管弦楽団 SMZ 169

第1幕 第13場

娘が王デモフォオンテにより神殿の生贄として指名されたことを知り、彼女を逃亡させようと謀る家臣マトゥージョに対し、父デモフォオンテを説得するまでその計画を停止するよう彼を説得した後、ティマンテが歌う。

アリア「もし、勇気と希望とが」K.73o (82) [70.4.25、ローマ] (カストラートの名歌手マンツォーリのために)

ソプラノ：ティマンテ

Se ardire e speranza Dal Ciel non mi viene, Mi manca costanza Per tanto dolor.	もし勇気と希望とが 天より私の許にやってこなければ、 たじろがずにはいられない、 これほどの苦しみに対しては。
La dolce compagna Vedersi rapire, Udir che si lagna, Condotta a morire, Son smanie, son pene Che opprimono un cor. (parte)	やさしい妻は 奪われてしまい、 嘆くのがきこえる、 死ぬべきものと定められて、 侠気と苦しみとが 心をしめつけているのだ。(退場) (海老澤敏訳)

リアン・ス・キス(ソプラノ)、レ・ホルト・ハーガ -指揮、ザ・ルツブ・ルク・モーツァルテウム管弦楽団 SMZ 169

第2幕 第6場

窮地に陥ったティマンテは力づくでもディルチェーアを救おうと、引き止める彼女を振り切って退場。彼女は王デモフォオンテの決めたティマンテの許婚であるクレウーザに向かって彼を救う手助けをしてくれるよう哀願する。歌い終わって司祭たちに連れられて、犠牲となるため神殿へと去る。

アリア「もし、私の悩みのすべてを」K.73p (83) [70.4-5、ローマ]

ソプラノ：ディルチェーア

Se tutti i mali miei	もし、私の悩みのすべてを
Io ti potessi dir,	あなたに申し上げることができたら、
Divider ti farei	あなたの心は千々に乱れることでしょう、
Per tenerezza il cor.	やさしさゆえに。
In questo amaro pasto	この苦しい事態の中で
Sì giusto è il mio martir,	私が自分の思いに殉じるのはとても正しいことなので、
Che, se tu fossi un sasso,	あなた方さえ石のように物に動じないおひとであつたにしても、
Ne piangeresti ancor.	あなたは、それでも、私のことを嘆き悲しんでくださるでしょう。
(parte fra le guardie ed i	(海老澤敏訳)
ministri, che la guidano al	(司祭と護衛に伴われ、神殿へと連れ去られる)
tempio)	

初稿：イ・イ・マリス(ソプラノ)、レ・ホルト・ルガ -指揮、ザ・ルツワ・ルク・モ・ツアルテム管弦楽団 SMZ 169

装飾稿：ジュリー・カフマン(ソプラノ)、イェルク・ペーター・ヴァイグレ指揮、ミュンヘン放送管弦楽団 SMZ 172

一方ティマンテはディルチェーアと密かに結婚し二人の間に息子オリントまでもうけたことを王デモフォオンテに白状する。王は激怒し、二人を別々の牢に幽閉する。

第3幕 第4場 + 第5場

弟のケリントが王をとりなし、許しが出たとティマンテに伝えにくる。ティマンテは王位の継承を弟に譲ると意思表示する。ところが、マトウージョが亡くなった妻から預かっていた手紙の封筒にディルチェーアが生命の危機に遭遇したときに開封するようにと書かれてあったのを思い出し、手紙を開くとそこには女王の手でディルチェーアが女王の娘であることが書かれていた。ティマンテはディルチェーアが自分の血を分けた妹であると知り、絶望的な心情をひとり歌う。

レ・ティ・ヴォとアリア「私はなんと不幸なのだ / あわれな幼子よ」K.73e (77) [70.3、ミラーノ]

ソプラノ：ティマンテ

Misero me! Qual gelido torrente	私はなんて不幸なのだ！ なんていう冷たい奔流が
Mi ruina sul cor! Qual nero aspetto	私の心になだれうつことか！ なんと不吉な有様を
Prende la sorte mia! Tante sventure	私の運命は示しているのか！ あまりの不運に私は
Comprendo al fin. Perseguitava il Cielo	やっと気づいたのだ。天は禁断の婚姻を執拗に迫った。
Un vietato imeneo. Le chiome in fronte	私の前髪が逆立つのが分る。私の舅であり父親なの
Mi sento sollevar. Suocero e padre	のがそれなら王なのか？ オリントは息子で甥なのか？
M'è dunque il re? figlio e nipote Olinto?	ディルチェーアは妻にして妹なのか？ ああ、
Dircea moglie e germana? Ah, qual funesta	これはなんと不吉にも混乱して相反する呼び名が
Confusion d'opposti nomi è questa!	入り混じっているのだ！ 逃げるのだ、逃げるのだ、
Fuggi, fuggi, Timante! agli occhi altrui	ティマンテよ！ 他人の眼にもうけっしてお前を晒す
Non esporti mai più. Ciascuno a dito	ずでない。誰もがお前を指さすことだろう。お前は老
Ti mostrerà. Del genitor cadente	いさらばえた父親の恥となることだろう。そしてどれ
Tu sarai la vergogna; e quanto, oh Dio,	ほど、おお、神よ、お前はみんなに噂されることだろ
Si parlerà di te! Tracia infelice,	う！ 不幸なトラキアよ、これがお前のオイディプス
Ecco l'Edipo tuo. D'Argo e di Tebe	なのだ。アルゴスとテーバイの復讐の女神たちが私
Le Furie in me tu rinnovar vedrai.	の中によみがえるのをお前は見ることだろう。
Ah, non t'avessi mai	ああ、そなたを知らねばよかったのだ、

Conosciuta, Dircea! Moti del sangue	ディルチェーアよ！ 血族の愛情を私は信じてしま
Eran quei ch'io credevo	ったのだ、恋の烈しい力なのだと、
Violenze d'amor. Che infausto giorno	なんと不吉な日だったのだ、そなたに初めて出会った
Fu quel che pria ti vidi! I nostri affetti	その日は！ 私たちの愛情は私たちになんと恐ろしい
Che orribili memorie	思い出となるのだろう！ なんとというおぞましい
Saran per noi! Che mostruoso oggetto	ものに、私は私自身にとってなるのだろう！
A me stesso io divengo! Odio la luce;	私は光を憎む。微風はすべて私をぞっとさせる。震え
Ogni aura mi spaventa; al piè tremante	る足許では大地も心許なく私には思われる。あたりには
Parmi che manchi il suol; strider mi sento	雷電が鋭い響きを発している。
Cento folgori intorno; e leggo, oh Dio!	そして、おお神よ！ 私は読むのだ、いずれの岩にも
Scolpito in ogni sasso il fallo mio.	私の罪状が刻み込まれているのを。
Misero pargoletto,	あわれな幼子よ、
Il tuo destin non sai.	お前は自分の運命を知らぬのだ。
Ah! non gli dite mai	ああ！ 彼にけっして言ってはならぬ、
Qual era il genitor.	父親が誰だったかを。
Come in un punto, oh Dio,	あっという間のように、おお、神よ。
Tutto cambiò d'aspetto!	すべては様子を変えたのだ！
Voi foste il mio diletto,	あなたは私のよろこびであったのに、
Voi siete il mio terror. (parte)	今では私の恐怖的なのだ。(退場)

(海老澤敏訳)

テイト・マリス(ソプラノ)、レ・ヘルム・ル・ガール -指揮、ザルツブルグ・モーツァルテウム管弦楽団 SMZ 168

王が探していると知らされたティマンテに、マトゥージョがもうひとつの手紙により実はティマンテ自身が王の実子でなくマトゥージョの子であると明らかにされ、ティマンテとディルチェーアは合法的な夫婦と認められる。そして王位を継ぐ王子としてケリントがクレウサと結婚する。デモフォオンテに下されていた神託「無実の王位継承者がいる間は毎年生贄を捧ぐべし」はこれで謎が解け、生贄は廃止される。

注1：モーツァルトのメタスタージョ関連のオペラは《シピオーネの夢》K.1772, 1772年、《ルーチョ・シッラ》K.135, 1772年(ジョヴァンニ・デ・ガメツラ台本、ピエトロ・メタスタージョ改訂)《牧羊人の王》K.208, 1775年、そして《皇帝ティートの慈悲》K.621, 1791年(ピエトロ・メタスタージョ原作、カテリーノ・マッツォラ編集)の4作である。

注2：メタスタージョ台本によるアリアは以下の通り(Tamino Klassik Forum への Ulli の投稿から)

Va dal furor portata, KV 19c, Tenor, aus **Ezio**, 2. Akt, Sc. 4

Conservati fedele, KV 23, Sopran, aus **Artaserse**, 1. Akt, Sc. 1

Ah, più tremar non voglio, KV 71, Tenor, aus **Demofonte**, 1. Akt, Sc. 1

Per pietà, bell' idol mio, KV 73b, Sopran, aus **Artaserse**, 1. Akt, Sc. 5

Fra cento affani, KV 73c, Sopran, aus **Artaserse**, 1. Akt, Sc. 2

Per quell paterno amplesso, KV 73d, Sopran, aus **Artaserse**, 2. Akt, Sc. 11

Misero me / Misero pargoletto, KV 73e, Sopran, aus **Demofonte**, 3. Akt, Sc. 5

Se adire, e speranza, KV 73o, Sopran, aus **Demofonte**, 1. Akt, Sc. 13

Se tutti I mali miei, KV 73p, Sopran, aus **Demofonte**, 2. Akt, Sc. 6

Non curo l'affetto, KV 74b, Sopran, aus **Demofonte**, 1. Akt, Sc. 7

Alcandro, lo confesso / Non so, d'onde viene, KV 294, Sopran, aus **Olimpiade**, 3. Akt, Sc. 6

Basta vincesti / Ah non lasciarmi, KV 295a, Sopran, aus **Didone abbandonata**, 2. Akt, Sc. 4

Ma, che vi fece, o stele / Sperai vicino il fido, KV 368, Sopran, aus **Demofonte**, 1. Akt, Sc. 4

Misera, dove son! / Ah! Non son' io che parlo, KV 369, Sopran, aus **Ezio**, 3. Akt, Sc. 12

In te spero [Fragment], KV 383h, Sopran, aus **Demofonte**, 1. Akt, Sc. 2

Alcandro, lo confesso / Non so, d'onde viene, KV 512, Baß, aus **Olimpiade**, 3. Akt, Sc. 6

Ah se in ciel, KV 538, Sopran, aus **L'eroe cinese**, 1. Akt, Sc. 2

<http://www.tamino-klassikforum.at/thread.php?threadid=1500>

注3：《デモフォオンテ》の代表作品は以下の通り(Wikipedia データをさらに編集)。

Antonio Caldara, Demofonte (November 4, 1733 Vienna, Name-day of the Emperor Charles VI)

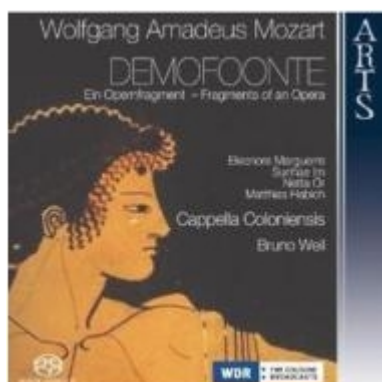
Francesco Mancini, Il Demofonte (1735, Naples) [together with D. Sarro and F. Leo]

Francesco Ciampi, Demofonte (February 5, 1735 Rome)
 Gaetano Maria Schiassi, Il Demofonte (carnival 1735 Venice)
 Leonardo Leo, Demofonte (1735)
 Egidio Duni [Duny], Demofonte (May 24, 1737 London)
 Giuseppe Brivio, Demofonte (carnival 1738 Torino)
 Andrea Bernasconi, Demofonte (carnival 1741 Rome)
 Christoph Willibald Gluck, Demofonte (January 6, 1743 Milano)
 Carl Heinrich Graun, Demofonte (1746)
 Johann Adolph Hasse, Demofonte (February 9, 1748 Dresden; 1749 Venice; 1758 Naples)
 Baldassare Galuppi, Demofonte (December 18, 1749 Madrid)
 Francesco Uttini, Demofonte (c.1750 Ferrara)
 David Perez, Demofonte (1752 Lisbon)
 Gioacchino Cocchi, Demofonte (1754 Venice)
 Antonio Pampani, Demofonte (carnival 1757 Rome)
 Tommaso Traetta, Demofonte (Autumn 1758 Verona)
 Niccolò Piccinni, Demofonte (May 1761 Reggio)
 Antonio Boroni, [Baroni, Borroni, Buroni, Burroni] Demofonte (carnival 1762 Torino)
 Niccolò Jommelli, Demofonte (1764 Stuttgart)
 Mattia Vento, Demofonte (March 2, 1765 London)
 Brizio Petrucci, Demofonte (December 26, 1765 Ferrara)
 Josef Mysliveček, Il Demofonte (January 1769 Venice , January 20, 1775 Naples)
 Giuseppe Sarti [Sardi], Demofonte (January 30, 1771 Copenhagen, carnival 1782 Rome)
 Pasquale Anfossi, Demofonte (carnival 1773 Rome)
 Maksym Berezovsky, Il Demofonte (carnival February 1773 Livorno)
 Giovanni Paisiello, Demofonte (carnival 1775 Venice)
 Joseph Schuster, Demofonte (1776 Forlì)
 Felice Alessandri, Demofonte (June 12, 1783 Padua)
 Angelo Tarchi, Demofonte (September 1786 Crema, 1786 Milano)
 Luigi Cherubini, Démophon (by Jean-François Marmontel) (December 2, 1788 Paris)
 Marcos Portugal (Marco Portogallo), Demofonte (February 8, 1794 Milan, Scala)
 Marcos Portugal (Marco Portogallo), IL Demofonte REV.(August 15, 1808 Lisbon, S. Carlos)
 Antonio Vivaldi (authenticity is debated), Demofonte (RV deest; performance unknown)

<http://en.wikipedia.org/wiki/Demofonte>

注4 : 1770年12月22日にモーツァルトはレーオポルトの手紙の追伸でミスリヴェエチェクのデモフォオンテ序曲の冒頭を引用している。(ザスロー交響曲 p.164 参照)

注5 : Wolfgang Amadeus Mozart “Demofonte”: Weil / Capella Coloniensis Habich Sunhae Im Marguerre ARTS 477468. Overture=K.74, K.440, K.63, K.368, K.99, K.74b, K.82, K.16a, K.83, K.77, K.299bによる。[韓国人バロック・ソプラノ歌手イム・ソンへの歌唱は一聴の価値あり]



注6 : Libretti d'opera italiani

<http://www.librettidopera.it/demofonte/demofonte.html>

(2009年4月5日作成)